

子どもの目線になって見えたもの

川辺尚子

五月十日（火） 晴れ

「気持ちいいところがあるよ」と誘われて

三歳児保育室から園庭に出て、十メートルほど先に、小川（庭の段差を利用して造られた人工の川で、夏場を中心に水道から水が流れる）があります。そこに小さな橋が架かっていて、その橋のふもとから、小さな男の子がじつと私を見ていました。

目が合って、何となく誘われるようにして近づくと、彼は「気持ちいいところがあるよ」と小さな声で話しかけてきました。

そこで、私も彼の横に腰を掛けてみることにしま

した。このころは、小川の水が流れておらず、川の縁に腰を掛けることができたので、ちょっと隠れた空間になっていました。腰を下ろすと、そこはとてもしずかで、風がすつと通りました。

「本当に、気持ちいいところね」と私が言うと、彼は「ママに会いたいの」と言いました。

彼は、まだ入園して間もない三歳児の男の子でした。そうか、そのことを言いたかったんだと思い、「そう。ママに会いたくなっちゃったのね」と声をかけながら彼を見ると、寂しそうにしている様子はなく、あちこちをきよるきよるとせわしなく眺めています。



ふと背中を丸めて彼と同じ目の高さになって、彼の目線の先を見ると、年長の女の子二人が手をつなぎ、軽やかな足取りでお山の上に向かって駆け上っていく姿が見えました。

そして今度は、後ろを振り

向く彼の目線の先を見ると、三歳児クラスの入り口と、その前で砂を掘ったり、運んだり、先生と話したりする子どもたちの姿がありました。

彼は、私の横で「ママがいい」「ママに会いたいのことつぶやくように言い続けながらも、じっとその様子を見ています。



彼と一緒に、担任の先生と数人の子どもたちの姿を目で追っていると、園庭の真ん中の桜の木が見えました。その木の根元に子どもたちの群れが見えました。

私は、「何をしているんだろうね？」と言いながら、ゆつくりと腰

を上げると、彼も立ち上がり、私の後をついて来ました。

子どもたちの群れに近づいてみると、そこでは、年長児が池で捕ってきたオタマジャクシをのぞき込んだり、虫かごに移し替えたりする子どもたちの真剣な姿がありました。

彼は、オタマジャクシがうごめく水槽の中をのぞき込んだり、年長児がオタマジャクシをすくい取る手元を



じつと見たりしていました。そして、逃げるオタマジャクシに「ひゃあ、ひゃあ」と騒ぐ子どもたちの姿に目を大きくしたり、思わず口元を緩めたりしていました。

そのうち、彼がふと顔を上げると、目線の先には、また年少児のクラスがありました。そこには、変わらず担任の先生や子どもたちの姿がありました。

そして彼は、ずっと手に持っていた虫かごに視線を戻すと、その場にすくと腰を下ろし、足元の砂をすくい取って、「ママのお弁当なの」と言いながら、虫かごの中に入れました。



子どもの目線になって、見えたもの

私は、二〇一一年度より、お茶の水女子大学附属幼稚園に勤めています。幼稚園教諭ですが、担任で

はなく、園内の研究のために記録を取る役割が与えられています。このころの私は、自分の居方についてかなり考え込んでいました。研究者として保育をする、保育者として研究する、どちらでもあり、そのどちらでもない、まだ働き方やかわり方がよくわからない時期でした。勤め始めて数日目でしたし、幼稚園に勤務するのも十年以上のブランクがあり、以前に勤めていた幼稚園とはずいぶん違った雰囲気でもありました……。でも、そういうことよりも、この幼稚園では新人保育者だという現実を突き付けられ、私に勤まるのだろうかと不安を抱いていたのです。どこにいても落ち着かず、あれやこれやと見て回っていたような時期でした。

そんな私への思いがけないお誘い。一人で川のくぼみに腰を掛けている彼が、こちらを振り向いて、「気持ちいいところがあるよ」と声をかけてきた時、私は、ちよつと不思議な感じがしました。今思えば、この誘い言葉が、彼のあどけない顔には不釣り合いな大人びた言葉に感じたからだと思います。面白さ

や興味深さなど不思議な思いを抱きながら、彼の隣に座ってみると、何と、そこは本当に気持ちの良いところだったのです。

「気持ちいいところ」に、彼と同じように、ただゆつたりと座って見上げると、木が風にそよぎ、葉っぱが揺れる音が聞こえました。そして、ふっと肩の力が抜けて、気持ちまでもがゆつたりとしました。

彼と同じ目線になってみると、さまざまな子どもたちの生き生きした姿が目飛び込んできました。

お山への階段を駆け上る年長児の二人は、大きくて優雅で、楽しげで、これからあの山で何が起ころのだろうとわくわくさせられました。

年少児クラスの前には、砂をすくっては運ぶ子どもや、バケツに黙々と砂を入れる子どもがいて、それぞれ真剣なまなざしが見えました。

また、子どもと共に、バケツを砂でいっぱいにして、先生先生の姿や、保育室の中から「せんせーい、せんせーい」と声をかけられ、「はあい」と優しく

答える先生の姿があり、年少組の先生と子どもたちの暖かく包まれた世界に見えました。

ファインダー越しに見た世界

子どもが見ている世界を眺めてみて、「ああ、幼稚園って何て幸せな場なんだろう」と思いました。そして同時に、自分が入園したての子どもたちと同じように、この世界をまだ客観的に眺めているという感覚に気付かされました。この幼稚園は、じっと見たい魅力的な世界でした。そして、「見ている」ことで精いっぱい、かかわるのは恐れ多いような気持ちでいました。

でも、だからこそ私は、幼稚園のカメラがあると、不思議なくらい堂々とあちこちを見て回ることができました。それは、「研究のための記録を取る」という大義名分が与えられていることで、「かかわる」ことよりも「見る」ことに重きが置かれていたお陰だと思えます。その時、その場所、その子どもへの思

いを込めてシャッターを切りながら、確かに記録を重ねることで、幼稚園を知り、ため込み、その場を共有していきたくて思っていました。きつと、そうやって、幼稚園の中に自分の居場所を見いだそうとしていたのだと思います。

この日出会った彼が、虫かごに砂や葉っぱを入れたことにも、同じような思いがあるように思えます。彼の虫かごには、砂や石や葉っぱが入っていました。そして、この日には新たに桜の木の根元にある砂が加えられました。彼は、この虫かごの中に母への思いを詰め込みながら、少しずつ幼稚園の思ひ出を積み重ねつつあるのではないかと思えます。

そう思うと、彼が私に声をかけたことが、ただの偶然ではなかったように思えてなりません。ほかの子どもや保育者が真剣に遊ぶ姿を見ていて、あこがれながらも、保育者としての居場所を模索していたことが、彼には見抜かれていたのかもしれない。

そして、私は、彼が声をかけてくれたことをきっかけに、時には一つの場にとどまり、子どもの目線

に合わせて座り込んだり、時には子どもと気持ちの赴くままに遊ぶことを通して、私自身がこの幼稚園の保育を経験し、体中で感じながら、保育者として育っていきたくて思うようになりました。

時が経って、今思っていること

あれから約一年が経ちます。保育者として、どのように働いたらいいのか戸惑い、悩んでいたことを思うと、ずいぶん子どもの姿から学んだのだということに気付かされます。

実はこの後、彼と私は一緒に遊ぶことが増え、そのうち、彼が私を見ると声をかけてくるようになりました。私がいると彼の遊びを邪魔してしまうような気がして悩みました。かつて別の幼稚園で勤務し、担任だった時には、自分という存在を手掛かりに、安心できる場を広げられるようにしてきました。でも、担任とは違う立場の大人として、どのように子どもたちとかわつたらいいのかわからなくなってしまうのです。

でも、日々の保育の中で、いろいろな子どもたちと出会い、フラインダー越しに眺めている間もなく、あちこちで子どもたちから声がかかるようになっていきました。そして、誘われるがままに虫を捕り、花を摘み、砂を掘り起し、山へ駆け登り、ままごとし、製作を手伝い、時には観客やお客になり、また時にはお化けになったり……、とにかく毎日子どもたちと遊んでいるうちに、悩んでいたこともあまいになったまま、時が過ぎていきました。

そして、彼はいつの間にか、木の線路をつないで友達と遊んだり、砂場で幼稚園より大きなお山をつくるといってバケツの砂をいっぱいにしたりして遊ぶようになっていました。

あの日、彼が桜の木の下で、持っていた虫かごに砂を入れた時のことが、特に印象に残っています。珍しい世界に引き込まれるようにして私について来た彼でしたが、ふと自分のクラスの方へ目をやり、担任の姿を確認してから砂を入れました。

小さい子どもにとって、新しく足を踏み入れた幼稚園は、どんなに豊かで大きい世界なのでしょう。でも、その子どもが、担任やクラスを大きなよりどころにしながら、この世界をじつと見て、ゆっくと味わい、だんだんと動きだしていくのです。そして、その子どもも、生き生きと遊ぶようになり、

やがてこの世界の担い手となって育っていくのでしょうか。そのことを、私自身がじっくりと見て、経験しながら学んでいるということを実感しています。



(お茶の水女子大学附属幼稚園)